

物語(フィクション)の意味論

Elucidating the meanings of fictional descriptions

発表者: 小山 照夫(情報社会相関研究系)

by: Teruo KOYAMA (Information and Society Research Division)

何がわかる?

従来しばしば無意味で利用できないと考えられてきた物語(フィクション)文について、その特性を検討することを通じて物語文を構成する能力の背景と、物語文の果たす重要な役割について明かにします。

どんな研究?

人間は経験した事実とは独立した物語(フィクション)文を構成できるが、この物語文構成の基礎となる言語の特性を考察し、物語文を構成する能力がどのような働きを持つかを研究します。

研究の目的

人間は直接に経験した事実とは独立した事態を文(物語文)の形で記述することができます。これらの物語文はしばしば現実の事態ではないことから無意味なものとしてきましたが、新しい事実を発見する発想という視点からは極めて重要なものです。この研究では人間の物語文を構成するための能力と、物語文を操作する能力について明かにすることを目的とします。

研究の方法

人間は言語によって以前には実際に経験したことの無い事態を記述することができます。

これらの事態はそれが実際に起こり得るかどうか疑わしいという点で物語(フィクション)である可能性を持つものです。

古典的な言語哲学の立場からは、実際には生起しない事態を記述する物語文について、偽あるいは無意味としてその詳細が検討されることはほとんどありませんでした。

しかし、実際には物語と現実の境界はそれほど明確なものではないし、物語はたとえ架空のものであったとしても、人間の興味を引く以上単に無視できるものではありません。また、経験しない事態を想起できることは、新しい知識を獲得する上で不可欠な能力でもあります。

架空の物語まで含めてその意味を考察するために、いくつかの物語世界が併存していて、その内の一つが、人間が行動を決定する上で依存するという点だけで特権的な意味づけを持つというモデルを考えてみます。

ここで物語文としての記述は、共通するテーマ

を持っており、相互に矛盾しない限りにおいて複数の文を組みあわせて一つの物語を構成することができます。

構成される物語世界は複数存在しますがもしそれぞれの間で矛盾がないなら、あるいは一部の物語文を置き換えることによって矛盾を解消できるなら、二つの物語を統合してより大きな物語とすることも可能です。

並列する物語は基本的に同等なものと考えられますが、人間が行動を決定する場合に限り、特権的な物語が存在して、この物語と矛盾しない情報だけが行動決定のために有効なもののみなされます。通常はこの物語を「現実」と呼んでいます。

この現実としての物語は、矛盾を引き起こさない限りで様々な仮説としての物語文を統合することが可能です。このことにより、人間は全く新しい行動様式を発想することができるなど、その創造性を発揮することができると考えられます。

参考: <http://research.nii.ac.jp/~koyama/official/lang/pdf/fiction.pdf>